# h a t e

ズガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｈａｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ０９７６Ｒ

【作者名】
ズガイ

【あらすじ】
複数の人間と一つの真実。
様々な奴により動くストーリー

# 第1話　鳥と獣

「おーい。雀、電話だぞ」
大きな声が聞こえる。そこで雀は本を閉じて獅子を見る。
電話をプラプラさせている獅子が立っている。
「今、代わるよ」

hate　1

「もしもし、何かご用ですか」雀が聞く。
「それが……」
相手は一旦間をおいてから言った。
「霞崎を殺してほしい」
「分かりました。詳細を教えてもらえますか。それといつ頃がよろしいでしょうか」そういうと相手は言った。
「喫茶店。あなた方のいるところの近くの喫茶店で会えませんか」

「獅子。一時間したら出かけるぞ。準備しろよ」
言いながら獅子を見ると何かを探している。
雀が獅子に近ずくと足にしがみ付いてくる。
「何だよ。急に」
雀が言う。獅子は泣き出しそうになりながら言ってくる。
「たすけてくれよぉ。これ見て」
机の上にトランプがマーク別に並んでいる。獅子は必死にハートの7と9の間を指さしている。
「8がないんだよ。8が」
雀は、足にしがみつく獅子を離してからハンガーからコートを取っ

てからパンパンと埃を払う。
「おい、８は諦めろ。おっ、あんな所にあったぞ」
雀は外に向かって指をさす。獅子がいきなり動き出す。
「どこだ。どこだ。愛する俺のハートの８」
雀は笑いを堪えながら言った。
「あそこにいっぱいいるじゃないか。８じゃなくて蜂が」
ガクッと肩を落とした獅子が言った。
「おまえ、覚えとけよ。絶対殺してやる。おまえ」
雀は、足にしがみつく獅子を離してからハンガーからコートを取ってからパンパンと埃を払う。
「おい、８は諦めろ。おっ、あんな所にあったぞ」
雀は外に向かって指をさす。獅子がいきなり動き出す。
「どこだ。どこだ。愛する俺のハートの８」
雀は笑いを堪えながら言った。
「あそこにいっぱいいるじゃないか。８じゃなくて蜂が」
ガクッと肩を落とした獅子が言った。
「おまえ、覚えとけよ。絶対殺してやる。おまえ」
「冗談に聞こえないな」
雀は、永遠苦笑いを続けた。
時計を見る。あと３０分。
「作戦たてるぞ。獅子」
そういうと獅子はイヤイヤソファーに座った。「冗談に聞こえないな」
雀は、永遠苦笑いを続けた。
時計を見る。あと３０分。
「作戦たてるぞ。獅子」
そういうと獅子はイヤイヤソファーに座った。
「で、今回は勝算あんのか」獅子は手に近所のスーパーのチラシを持っている。「何割ぐらいだよ」
それを聞いて雀は黙る。

「分からないな」
雀は顔を上げると獅子は寝ている。
雀はしょうがなく本を開き読み始める。

だめだな。こりゃ。
「で、今回は勝算あんのか」獅子は手に近所のスーパーのチラシを持っている。「何割ぐらいだよ」
それを聞いて雀は黙る。
「分からないな」
雀は顔を上げると獅子は寝ている。
雀はしょうがなく本を開き読み始める。

だめだな。こりゃ。
「で、今回は勝算あんのか」獅子は手に近所のスーパーのチラシを持っている。「何割ぐらいだよ」
それを聞いて雀は黙る。
「分からないな」
雀は顔を上げると獅子は寝ている。
雀はしょうがなく本を開き読み始める。

だめだな。こりゃ。

# 第2話　男と女

「雀と獅子について教えてくれないかな」
流梨(るり)が男を回転イスに縛り付け脅している。
刃(じん)は、男と同じようなイスに座っている。

hate　2

「おい、流梨。かわいそうだぞ。その男が。そこまで言うなら本当なんじゃないか」
刃はのんきにくるくる回っている。
「あんたさぁ、ホントに出世したいの」流梨は苛立っている。「それとさ、他の情報は売れるんだよね。分かったかい。おバカさん」
「なんだと！！もう一回言って見ろよ」
刃も黙ってなかった。だいぶ頭にきたらしい。
そんなときだった。
「あのぅ、０についてなら知ってます」
男は、申し訳なさそうに言った。０（ゼロ）とは謎に包まれている奴だった。
流梨と刃は目をあわせ、頷く。
「今から、情報屋を呼ぶから待っていてね」
流梨は優しく言う。
刃は男のイスを足で蹴り回す。
「やるじゃんか。こいつ」
刃もうれしそうだった。
「大体、五十万くらいかな」
ルンルンに流梨はなっている。
「早く行こうぜ。飯でもさ」
刃がそう言うと電話が鳴った。

「もしもし、あっ何すか。はいはい」
刃が適当に答えているのを気にしている流梨が刃に言った。
「もしかして、社長なの」
「そうだけど」
刃は、言った。それを聞いて流梨は電話を奪い取り流梨が謝っていた。
「で、なんですか」流梨は丁寧に言う。「分かりました。今すぐ行きます」
電話を切り刃に「行くよ」とだけ言い歩き出す。
それに裏から刃がついていった。
車に乗ると刃は笑いながら言った。
「どこ行くの。飯なのか」
「ちがうわよ」
強くアクセルを流梨は踏んだ。

# 第3話　8

早く行かなければ。
これは仲介役の役目だから。

ｈａｔｅ　３

喫茶店に着くと隅の席を四つ分だけ空けておく。
ウェイトレスが水を持ってくる。
「ご注文は」
「オリジナルコーヒーで」
なんとなく目に止まったコーヒーを頼む。
あと五分だな。一応、時計を確認をする。
足長蜂の絵をさっき貰ったチラシの裏に描く。
「いらっしゃいませ」
さっきのウェイトレスが言った。
手をひらひら振ると、軽やかな男とテンションが低い金髪が一人こっちに来る。
「雀です」軽やかな方が言った。
「獅子だ」テンションが低いのが言った。「それ、バカにしとるのか。俺を」
一瞬焦ってしまう。なんだコイツとしか思えないことを言ってきたのだった。
「挨拶代わりにと思ったんですが、下手ですか。これ」紙をひらひらさせてみた。「美術はいつも良かったのに」
そこで雀が口を挟んだ。
「こいつ、トランプのハートの８をなくして機嫌悪いんで無視していいよ」

獅子は、絵を手に持ちうなづいている。
「まぁ、巧いな。これは」
獅子が気分屋だというの分かる。雀はそれはセーブするというのが分担なのが分かる。
いつも通り分析をしてしまった。
しかし、この二人があまりアンバランスさに笑いを堪えるのに必死だった。
「本題になんですが。霞崎を明日の昼にお願いします」
そこに獅子が何か気に食わないのかこっちを指を指して言ってくる。
「おまえ、名前はなんて言うんだよ」
「足長蜂。それが俺の名前だ」
獅子がいやな顔をした気がしたが雀は気づいてないらしい。
「そうか。これは名刺代わりなんだね」
雀が絵をみて言った。
そんなことで作戦成功したのだった。

喫茶店からでると電話がかかってきた。
「霞崎の家に行ってくれないか。足長蜂」
0からだった。
「どうしてだい。急に。まずいことでもあるのか」
足長蜂は車の鍵を開け乗り込む。
「それが……。危険なんだよ」
力なく0は言った。
自分で行けばと言いたいのを堪えながらアクセルを強く踏み込む。
サイドミラーに映っている獅子が指でっぽうで撃ってきたのが見えた。
「行くしかないか」
と大きく言ったのだった。

# 第４話　襲撃者

「おい、あいつ。足長蜂って言ったよな」
獅子は、足長蜂の乗る車を指でっぽうで撃ちながら言った。

ｈａｔｅ　４

「足長蜂は、昔から０の手先だった奴の名前だな」
雀は、あの絵を見ながら言った。
「俺たち、うまく使われそうだな」
獅子は絵を雀からひったくり破り捨てた。
「これでも、やるか。この仕事」
雀は獅子を見ながら言った。
獅子は今まで以上に真面目な顔をして言った。
「やるしかないだろ。プロだからな」

そんなときだった。
拳が飛んでくる。
獅子はそれを避け、いきなりの事に驚きながらも右拳を相手のあごを狙う。
外れる。そこで、相手は走り出す。
「俺はあいつを追う。おまえは先に帰ってろ」獅子が走り出す。
雀は一人になると拳銃を取り出し裏にいる女に向ける。
「おまえは何だ。ずっとついてきて。うざったいな」
女はそっと笑いながら言った。
「ごめんなさい。これは、あなた達を狙う前の下見ってとこかな」
「バカにしてんのか。獅子にはアイツじゃあ勝てないぜ」

そんなとき、男が塀から戻ってきた。
「ただいま」
雀は言うしかなかった。
「アイツ、バカなのが弱点だな」
「まぁ、ここら辺で帰らせて貰います。一応、私は流梨。こっちは刃ってことで、４６４９」
流梨は歩き出すと裏から刃がついていった。

家に戻ると外で獅子が待っていた。
「早く開けてくれよ。寒い」
「おまえ、自分の家に入れよ」
雀は鍵を開けながら隣の部屋の扉を足で蹴った。
そうして、家に入ると廊下に一枚の紙切れが落ちていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0976r/

ｈａｔｅ

2011年10月8日01時20分発行